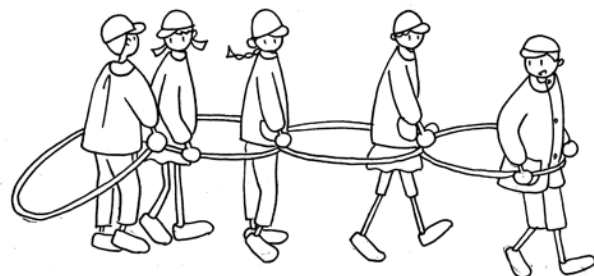


だ み よ く り に

No.749 令和6年5月1日発行



子どもの力の眩しさに

春を飛ばして夏のような気温の日がありますが、体調に変わりありませんか。毎日、子育て、仕事、家事、介護……同時にこなすのは大変なことです。時にはご自身に労いの言葉をかけ、お体に気をつけてお過ごしください。

さて、子どもたちと過ごしていますとたくさんのドラマがあります。毎日、いいえ毎瞬ドラマの連続です。今回はその中でも心に残ったドラマをご紹介します。

靴箱から保育室までの子どものやりとり。読みどころは、泣いている子と手をつないでいるのは大人の保育者ではなく子どもである、というところで

登園時、お母さんと離れることが寂しくて涙を流している子と手をつないで保育室へと向かっています。「どうしたの？こいしくなった？それはさみしいってことなんだよ」と声をかけ、途中の踊場では後ろから付いてきているかを確認するようにそっと後ろを振り返ります。そして「ここでいっかいおみずのむ？おみずのんでおちつこう」と水筒を開けて、促します。体は小さいけど、まるで大人のような見事な関わり。そして保育室に入る頃には泣いていた子の涙は止まり、微笑んでいました。

園庭に咲いているチューリップをめぐって年中さんに起きた一大事。大人にとって当たり前のことが子どもにとってはいかに大発見で素敵な出逢いか、大人と子どもの視点の違いが読みどころです

「せんせい、たいへん！チューリップがわれてる」一大事だと言わんばかりに3名の子が走ってわたしを呼びに来ました。誰かけがをしてないだろうか、プランターが劣化して割れたのか危険物が紛れてしまったか、いや朝先生方が環境整備をしてくれている、一体……そんなことを考えながら子どもたちに連れられて、向かったそこには見事に咲いているチューリップがありました。「みてみて、ここ！われてるの」「どうする？」子どもたちが指差すところを見ると、そこは花びらの重なる隙間。「割れている」と思ったようです。花びらが数枚重なったものとは知らず一つのもの、と思っていたのでしよう。そこから花のつくりの話をし、砂がかかっていたら「かわいそう」と言って砂をはらい、チューリップを愛でる時間となりました。子どもたちに芽生えたチューリップへの興味を演ずることのないよう大切にしようと仕掛けを蒔いたことは言うまでもありません。

一人ひとりの子どもの力、可能性はすばらしいものです。一つ目のエピソードは、自分がまわりの大人、ご家族から同じようなことをしてもらったからこそその行動なのでしょう。「子どもにとって家族が全世界」と書かれた本を読んだことがありますが、まさにこのことでしょうか。ご家庭で受けた経験が自然と子どもの中に染み付いていくのです。二つ目のエピソードは、子どもたちが初めての発見に出逢った場面。そのときに周りの大人がどう関わるかで、子どもたちの興味関心のその後が左右されます。興味関心がせつかく芽生えたのですから、そのチャンスを大切にしたいですね。だからこそわたしたち大人は背筋を伸ばして子どもたちの瞬間、行動を見逃さずにいなければなりません。体や行動面での成長、そして心の成長。子どもたちの成長に負けずにわたしも日々精進していきます。

さて、4月の環境の変化を、子どもたちだけでなく保護者の方々も懸命に受け止めようとしている様子が伝わってきました。そのような姿から、お父さまを愛情深く大切にされていると感じ、ある言葉を思い出しました。「羽包む」です。「はぐくむ」と読みます。この言葉をうんだ方は、子育てについての著書が何冊もある津守房江さん。「鳥が羽でひなを軟らかく包んで育てるようすをいう言葉」と表現されています。子育てはすぐに結果が見えず、自信を感じにくいことと思います。特に今は環境の変化に泣いたり、なかなか寝つけなかったり、落ち着かなかったり……そんな中、園では保育者がしっかりと関わっていくことで「ここは安心できる場所」だと思えるようになり、そして自分をのびのびと発揮するという次の段階へうつつっていきます。少しずつ段階を経ていくのです。すぐに結果が見えないのは、私たち保育者も同様です。子どもたちの「いつか」を信じて、日々を積み重ねています。「こんなときもあった」「大変だったけどやってよかった」と思い返せる日が来ることと思います。その日のために子どもたちのドラマに寄り添い、皆さまと一緒に羽包んでいきたいと思っています。

皆さまのご理解ご協力のお陰さまで、滞りなく4月らしい時間を過ごすことができました。感謝いたします。引き続きどうぞよろしくお願いいたします。